

青年期の適応的な時間的展望の形成を促進するサポートの検討

——過去のとらえ方タイプに着目して——

○宇野あかり（東北大学大学院教育学研究科）

キーワード：時間的展望、ソーシャルサポート、青年期

目 的

時間的展望とは「ある一定の時点における個人の心理的過去、現在および未来についての見解の総体」のことで、我々の行動や意識などに大きく関わる。したがって適応的な時間的展望を形成することは重要な発達課題といえる。時間的展望研究はこれまで未来次元に偏重していることが指摘されてきた。石川（2014）では、そのような背景を踏まえ青年の過去のとらえ方を捉えるため、自身の開発した過去のとらえ方尺度によって、統合群、過去軽視群、葛藤群、とらわれ群を見出し、過去のとらえ方と目標意識の関連について検討している。本研究では石川のモデルに倣い過去のとらえ方タイプの特徴、及び過去のとらえ方と全体的な時間的展望の関連を検討する。また、時間的展望研究に限らず、挫折経験からの立ち直り過程等、過去に関する先行研究を概観すると、過去のとらえ方はマイナスな出来事を経験した際の周囲のサポートに大きく影響を受けることが推測される。以上のことを踏まえ、統合群が他群より適応的な時間的展望を有しているか、その他のタイプがどのような時間的展望を有しているかを検討すること、統合群がマイナスな経験をした際に周囲から得たサポートを明らかにし、適応的な時間的展望の形成に繋がるソーシャルサポートの内容を探索的に検討すること、を本研究の目的とする。

方 法

宮城県内の大学生 232 名に質問紙調査を行い、225 名（男性 149 名、女性 76 名）を分析対象とした。年齢は 18～23 歳（平均年齢 19.60 歳）。質問紙の構成は以下の通りである。①フェイスシート：性別・年齢・学年②自由記述：過去にマイナスな出来事を経験した際、乗り越えるきっかけとなったサポートは何だったか、受けなかった場合にはどんなサポートを受けることが望ましかったかを尋ねた。③時間的展望体験尺度（白井，1994，1997）：18 項目 5 件法、「目標指向性」「希望」「現在の充実感」「過去受容」の 4 因子からなる。本尺度の得点が高いほど適応的な時間的展望を有していると定義する。④過去のとらえ方尺度（石川，2013）：30 項目 5 件法、「連続的とらえ」「否定的態度」「受容的態度」「わりきり態度」「否定的認識」の 4 因子からなる。倫理的配慮として、配布時に参加は任意であること等を説明し、表紙にもその旨を記した。

結 果

過去のとらえ方尺度の下位尺度得点に基づき、クラスタ分析（Ward 法，平方ユークリッド距離）を行った結果、4 タイプが見いだされた。各タイプの特徴を検討するため、4 タイプと過去のとらえ方の下位尺度得点について一要因分散分析を行った結果、過去のとらえ方の全下位尺度得点において群間の得点差が有意であった ($p < .001$)。その後の多重比較でも全群間で有意差が見られた。結果から、クラスタ 1 は肯定的側面の「連続的とらえ」「受容的態度」が最も高く、「否定的態度」「否定的認識」が最も低かったため、連続的に時間とらえつつ、過去を肯定的に認識できている統合群とした。クラスタ 2 は「わりきり態度」が最も高く、他の下位尺度は低かったため過去に対する意識が希薄である過去軽視群とした。クラスタ 3 は「わりきり態度」が低く、その他各下位尺度が

高かったため、過去を軽視せず両極的な感情が混在している葛藤群とした。クラスタ 4 は「否定的態度」「否定的認識」が最も高く、その他の各下位尺度最も低かったためとらわれ群とした。結果として石川（2014）と同様のタイプが得られた。

過去のとらえ方タイプごとの時間的展望の特徴を明らかにするため、4 タイプを独立変数、時間的展望体験尺度の下位尺度得点及び総得点を従属変数とした一要因分散分析を行った結果、全ての群間で得点差が有意であった ($p < .01$)。その後、多重比較を行った結果、統合群が全下位尺度得点及び総得点において 4 群中最も高く、とらわれ群が最も低かった。

次に、ソーシャルサポートの内容に関する記述内容を、心理学を専攻する学生数名の協力もと「傾聴」「助言・励まし」「配慮・見守り」「認知変容」「環境調整」「サポートなし」の 6 つに分類した。過去のとらえ方タイプによってサポート内容に差異が見られるかを検討するため、4 タイプとソーシャルサポートの 6 つのカテゴリに関する χ^2 検定を行ったところ、有意な偏りが見られたため ($p < .01$)、その後残差分析を行った。その結果、「配慮・見守り」はとらわれ群で有意に少なかった ($p < .05$)。「認知変容」は統合群が有意に多く ($p < .01$)、過去軽視群が有意に少なかった ($p < .01$)。「環境調整」はとらわれ群が有意に多く ($p < .01$)、「サポートなし」は統合群が有意に少なかった ($p < .05$)。

考 察

以上の結果から、統合群は最も適応的な時間的展望を有していることが明らかになった。過去軽視群は時間意識が希薄である刹那主義的側面が見られ、葛藤群は過去及び未来に両極的な感情を抱いており、そこから生じる不安が現在の感情にも影響していると推察された。とらわれ群は、不適応的な時間的展望を有しており、過去のマイナスな出来事が現在や未来にまで悪い影響を与えていることが明らかになった。

過去のとらえ方タイプとソーシャルサポートの関連については、適応的な時間的展望を有している統合群ほど「認知変容」等の「サポート明瞭性（受け手側のサポートを受けているという認識のしやすさ）」の低いサポートが多く、一方でとらわれ群ほど「環境調整」等の「サポート明瞭性」が高い直接的サポートを多く受けており、「配慮・見守り」等のサポート明瞭性の低いサポートが少ないことが示された。このことから、サポート明瞭性の低い間接的サポートを多く受けていることが、適応的な時間的展望を促進する上で重要であることが示唆された。そして、統合群では「サポートなし」が有意に少なかったことから、そもそもマイナスな出来事を経験した際にソーシャルサポートを受けること自体が、出来事を肯定的にとらえ直し適応的な時間的展望を形成することに繋がることを示唆された。

(UNO Akari)

主要引用文献

- 石川茜恵(2013). 青年期における過去のとらえ方の構造：過去のとらえ方尺度の作成と妥当性の検討. 青年心理学研究 24(2), 165-181
- 白井利明(1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究. 心理学研究 65(1), 54-60